

絵本読後の話し合いから小学生が抱く家庭の父親・母親像を探る

—中国昔話「ひやくにんのおとうさん」を用いて—

本山 ひふみ

Parents images of elementary school students from talking after reading picture book

Hifumi Motoyama

キーワード：小学生 elementary school students、父親像 father's image、母親像 mother's image、話し合い talking、絵本 picture book

I 研究の動機

平成20年3月の学習指導要領改訂に際して、家庭科における教育内容は、小学校教育から中学校教育への系統性を持たせるため、A B C Dの4領域に再編された¹⁾。

小学校における家庭科は、第5学年、第6学年のみに学習するものであるが、それまでの学年における関連学習内容を整理してみると、第1学年、第2学年での生活科、第3学年以降の体育科の保健分野といった教科と、「道徳」において第1学年から第6学年まで通して、家族について扱っていることがわかった²⁾。

そこには、生活科や保健では学年ごとに違った目標や内容が示されているが、「道徳」では、『父母・祖父母を敬愛』という言葉が全学年に用いられている。精神的にも成長の著しい小学生時代に、果たしてこの『敬愛』という種類の言葉だけで表現できるのであろうか、家族に対する小学生の思いの変化を、このように大まかに捉えるだけでよいのだろうか、と思った。

家庭科教育の研究の中には、小学校低学年から一貫性のある教科として位置づけを望む考えもあり³⁾、その際には、家族への思いを学年ごとに丁寧に捕らえていく姿勢が必要となろう。

そこで、筆者がこの8年間、小学生を対象に続けてきた絵本の読み聞かせを活用できないだろうかと考えた。

II 研究の方法

名古屋市立A小学校における毎週木曜の業前活動「読書タイム」には、児童の保護者を中心とした読み聞かせボランティアが、概ね隔週で教室を訪れ、読み聞かせを行っている。通常は配当学級もランダムであり、ボランティアは訪れる学年に応じた絵本を自ら選び、音読して、児童とお話の世界を共有するものである。

この研究では、音読だけで終わらせず、読後に学級児童と読み手（筆者自身）が対話することで、各学年児童の父親像、母親像を探ろうとした。

取り上げる絵本は、以前、1年生に読んだ際、児童から次々に言葉が出てきて、空想を膨らませあい、楽しく対話できた中国の昔話「ひやくにんのおとうさん」（福音館）⁴⁾を用いることにした。

また、6年生にとっても興味を持てる内容であるかどうかを知るため、6年生の1学級で予備研究を行った上で、読後の対話テーマを2つに絞った。その後、学校管理者、担任教諭の協力を得て、全学年の1学級で実施した。

実施に際しては、児童に見えない位置で録音し、テープ起こしにより対話内容を確認した。

絵本の内容と事前の1年生、6年生で行った予備研究の様子、および対話のテーマ設定は、以下のとおりである。

1. 絵本の内容

働き者の若い夫婦が山奥で見つけた大きな瓶、その中にうっかり落とした一枚の笠が、取り出すと百枚になっており、夫婦は村人に分けた。鉄鍋も同様に配ると、噂を聞きつけた威張った地主が、家来に命じて瓶を奪い、屋敷に運ばせた。地主が中を見ようとしたが、暗いので蠟燭で照らすと蠟燭が台から落ち、中から百倍の炎が出た。慌てて水を掛けるとそれも百倍になり、火事から洪水に。収まったころ様子を見に来た地主の父親が、瓶の中を覗いた拍子に滑って中に落ちた。地主が引き上げると父親は一人ではなく、次から次へと出てきて、とうとう百人になり、屋敷中は父親であふれかえる。「もう懲り懲りだ」と思った地主は、瓶を裏の竹やぶに捨てた。

2. 予備研究1年生の記録

(2008年10月2日、1年△組にて)

タイトル時点でも、始めに瓶から笠が出てきた時点でも、話の筋を想像する声あり。子どもたちは興味津々で、目をくりくりさせ、途中でも感じたことをいろいろと口にする。担任教諭も喜び、クラスの雰囲気も温かい。最後には「その瓶ほしい」「どこにあるの?」中国のお話だから中国にあるかも、と答えると、「行ってみたい」「探す」などの声。

ひとりが「ゲームを入れればいい」と言えばまわりは一瞬喜び、すぐに「おんなじゲームばかりじゃしょうがない」の声。「1円入れれば百円になる」「百円玉入れればいい」「一万円入れる」「百万円の束を入れる」など、どんどん欲張りになって話が膨らんでいき、言っている子どもたちが計算できなくなってくる。算数に生かしたらおもしろいかも…と、ふと思う。

3. 予備研究6年生の記録

どうしてお父さんが百人だと困るのか、お母さんだったらどうなのか、を質問してみようと考えながら、予備研究を行った。

(2008年12月11日、6年△組にて)

皆、最後まで黙って聞いており、「地主はお父さんが百人出てきてどう思ったと思うか」と質問すると、誰の声も聞かれない。「日直」の声に日直を当ててみるが言葉が出せない。

「嬉しいのとは違うと思う?」と尋ねると、「嬉しくないと思う」と答え、別の子が「気持ち悪いと思う」「怒られる時ヤバイ」「きもい」「きもい」と同感が続く中、「お年玉一杯もらえる」の声が出ると大勢が声を出し始め、「お前お金目当てか」などと隣同士がやりとりをする。「他の家に99人あげる」「一人残す」「五人かな」「二人くらい」の声もある。「お父さん百人でたら嬉しいと思う人、手を上げて」と言うと、いない。「ふたりがいい人」と聞くと、女兒一人が挙手。理由を聞くと「いいことがいっぱいある」と答えた。一方で、隣と話しているうちに「最初から金入れやすい」と結論づく男児も。

次に「百人出てきたのがお母さんだったらどう?」の質問に移ると、即座に「ぜんぜんいらん」「捨てる」「捨てても帰ってきちゃう」などロ々に言う。「百人いてもいい人」に対して挙手なし、「全部捨てちゃう人」に対して「はい」と男児、さらに先ほど父二人と答えた女兒も挙手、同時に「あ、でも全部はいかん」「ひとりは要る」など複数の声あり。

何とかまとめて欲しいような空気を感じたので「それじゃあ、本当はお父さんは一人がいい人」と言うと、挙手多数。「お母さんも一人がいい人」にも挙手多数。これに対し先ほどの男児は「エー」と大きな声で反応。「本当はお父さんもお母さんも一人も要らない人」に先ほどの男児が迷いながらも挙手はできない。私がわざと「6年生になると、そう思っている人もいるようだね」というと「こりゃヤバや」「反抗期だから」との声。私が笑顔で「反抗期だから、か」と受け止めると、ようやく安堵した雰囲気になり、礼を言って終えた。前の扉から教室を出たら、後ろの扉から顔を出した女兒ひとりがもう一度絵本を覗きに来て「お父さんいない人にあげる、ハハハ」と愉快そうに言った。

この学級での様子を、あとで管理職に話すと、「自由に話して行き過ぎると、自分たちで揺り戻そうとする、子どもたちはそういう力を持っている」といった内容を話された。

4. 対話のテーマ

以上の予備研究から、全学年共通で2つのテ

一マを投げかけることにした。

第一のテーマは「地主はお父さんが百人出てきて、どう感じたのだろうか」

第二のテーマは「瓶を覗いたのがお母さんで、お母さんが百人出てきたらどう思うか」

Ⅲ 研究の結果

1. 1年〇組 (2009年1月21日実施)

読み始めてすぐ、「瓶って何？」と聞くので、「お茶碗のような瀬戸物でできている大きい入れ物」と説明。話の前半ですでに「一円入れたら百円になる」の声が聞こえたが、ここでは聞き流した。百倍になるたびに歓声が上がリ、中盤で「だから百人のお父さんなんだあ」の声。百人のお父さんが出終わったところで、「もう一回入れたら199人になる」「え、200人でしょう」「でも一人は入れるんだから199人だよ」と男児が議論し始めたので、しばらく待っていたが平行線。小さい声で当人に「199かもしれないね」と相槌を打って次に進める。読み終わると、「おもしろかった」「この瓶がほしい」の声の中、第一の質問に入る。

質問に対する答えとして口火を切ったのは、男児の「影分身みたい」という言葉。それ以外発言が無く、主人公がどう思ったと思うか、という人の気持ちを類推させる質問がわかりにくいかもしれないと思い、「もしみんなが、お父さんが百人になってしまったらどう？」と尋ねると、先ほどの子が「影でわかる」。別の女児が「一人だけ残して99人は捨てる」と言い、男児の発言から思いついたのか、続けて「影のあるやつが本物」「影が無いやつは偽者」「偽者は捨てる」と周りの子どもが同調する。その後は「もう一度お父さんを入れる」「水を入れる」「雷を入れる」など残酷な連想になっていくので打ち切った。

第二の質問、お母さんが百人になったら、に移ると、「別にいい」「いいよ」「だったら働かせる」口々に意見を言い始め、「大盛りのご飯を作ってもらえる」「宿題が百個溜まってもすぐやってもらえる」「それはお父さんでもいい」「いや、でもお母さんのほうが頭いい」などの声。「お母さん百人だと怖い」「怒られる」「お父さんでもそうだよ」ここで皆が盛り上がり発言するの

に担任が耐えられず「しっつ」と2～3回言っているのを、私はあえて無視していたが、ついに担任は、ひとりの子を指して発言させようと合図した。「違う意見かな？」と私が指すと、皆も静かになり、その男児は小さい声で「一人がいい」と言う。私から「一人がいい？お母さんも？」と聞き返すと頷くが「どうして？」に対しては声が無い。「どうしてかわからないけど、一人がいいんだね」と受け止める一方で、周りの子どもは先ほどの続きを話し始めたようでもた賑やかになる。最後に「百人居ると色々してもらえていいこともあるし、でもよく考えると一人がいいと思う人もいるし、それぞれの考えがあるんだよね」と締めくくった。

担任教諭は、ひとつの結論に向けて方向付けることを望んでいたようだが、多くの子どもたちが話題にしている内容から距離があって、他の子どもは理解できなかったようだ。が、終了後、質問の意図を担任教諭に話し、全学年で同じ質問をする予定だと伝えると、大変興味を示され、結果が出たら教えてほしいと言われた。

このことを後で管理職に話すと、この担任教諭は何事にもまじめに真剣に取り組むとのこと。そのまじめさ故に、却って児童と対話できなくなっている面もあるかもしれないと分析された。

2. 2年〇組 (2009年3月5日実施)

最初の質問に対しては、すかさず「びっくりした」の声。しばらくほかに声も無く、視線の合った子に当ててみると「怒られたら怖い」。次に挙手した子どもは「もうこの瓶は要らない」また別の子が「どれが本物のお父さんだろうと思う」ほかには「なんじゃこれーと思った」との発言。どうやらそれ以外に言葉が出てこないようなので次に移った。

第二の質問に対しては、最初の発言が「赤ちゃんが生まれる」「お母さんがみんなご飯を作っておなか一杯になっちゃう」「お母さんの仕事先に皆が行くとパンパンになっちゃう」などと、第一の質問よりはリラックスした雰囲気発言が続く。「トイレがパンパンになっちゃう」「一緒に買い物に行ったとき、100円分だけお菓子を買ってあげると言われたら、すぐ一杯になっちゃう」これに「う～ん、ちょっと計算がむずかしいね」と応じてみると、すぐに別の子が「計

算できるよ・・・一万円分」「お母さんが教育ママだったら、家で勉強が大変になってしまう」「お母さんが掃除をしようとするときに、ぶつかっちゃう」などの具体的な場面が次々出された。

3. 3年〇組（2009年1月29日実施）

まだ全員が着席できていないにもかかわらず、担任教諭が号令をかけてしまう。この数年、各学級を回らせてもらっていると、こういったちょっとした配慮不足が学級経営に大きく影響することを肌で感じる。

挨拶のあとになったが、椅子の間を詰めさせて整えたが、児童はそれには素直に応じる。また、絵本にも集中している。だが、読み終わると同時に皆が口々に、瓶に何かを入れる話を友達と始めて騒がしくなる。それを遮って質問を始める。

第一の質問に対しては、すぐに「疲れた」「怖い」の言葉。「怖くは無いよ」「気持ち悪い」「びっくりする」「ありえない」と続く。「困る」「食糧が足りない」「洗濯物が大変だ」「食事でも大変」「家の中にこんなに一杯入れるのかな？」などの衣食住を心配する声。そこから連想したのか「トイレはもっと大変だよ」「俺が先に行く、俺が先に行くってね」など具体的に生活場면을想像している。

第二の質問に移るときも騒がしく、相当大的な声でないと伝わらない状態ではあったが、すぐに「妊娠したら赤ちゃんが生まれる」「料理が豪華になる」「洗濯物がすぐ済む」「うちの仕事をばっばかばっばかやってくれる」など家事の話題になる中、「だけど、朝起こす時に、やかましいかも」という女児の発言あり。子供を起こす時に大勢の声が重なるという意味のようだ。この段階で、真剣に発言している子も居る中、がやがやと無関係の声を出している子も大勢あり、大変騒がしい。「テレビがいっぱい要る。お母さんはよく見るから」「お母さんはお洋服が好きだから一杯買いたくなる」と女児の意見。この騒がしさは、自分の興味と違うところに話題が行っているためであろうと考えて、最後に、「もしあなたがこの瓶を手に入れたら、何を入れるかな？」と聞くと、口々に「お金」「お金」・・・最後の挨拶に移ろうとしても、騒がしくて収集がつかない中、担任が大声で制して初めて静か

になる。普段の様子がこうなのだろう、ほとんど友達の発言を聞いている様子もなかったのは、他者理解の度合いと無関係ではなからう。発問に応じて主人公の立場で物事を考えることが苦手な児童が多いように感じた。確か以前、管理職も、この学級の運営の難しさ、担任教諭の課題を口にしていた。

何とか挨拶が終わって、椅子を元に戻すとき、前にいた女児が「私ならまゆちゃんの猫を入れるの。だってかわいいんだもん」と言いに来た。

4. 4年〇組（2009年3月5日実施）

第一の質問に対してすかさず男児が挙手して「はい、気持ち悪いと思った」と答える。すぐに別の男児が「一杯いても自分のお父さんが一杯いるんだから嬉しいと思った」という反対の意見も。「引っ張るのが面倒くさかっただろう」という声も聞かれる。女児からは「どれが元になったお父さんかわからない」とも。このクラスは皆が静かな中で、ひとりひとりが小声で発言し、私が聞き取って確認して皆に伝えると、そのつど表情が和んだり納得したりしている。まったく別の角度から「鏡がなくてもいい」との発言に対し、私が意味をつかめず聞きなおしていると、回りの子どもが言葉を補って私にわかるようにしてくれたので、あちこちに自分の顔があるわけだから鏡が無くても自分の顔がわかる、という意味だと理解できた。「それなら百人も要らない」「家来にすればいい」という考えも出る。それには「おじいさんから家来にはなれない」「おじいさんはいりませんか？と村人に配ってしまえばいい」との意見に対しては、わぁーと沸き、「要らんし」の反応。皆口々に「いらん」「いらん」「食費がかかる」の声には皆大笑い。お父さんが居るのに配られると二人になるからね、などと私が言うと、「お父さんが死んじゃった所に配ればいい」それはいい考えかも、と受け止めていると、「でも食費がかかる」と、もう一押しする女児もいる。「もっと若い方がいい」と言っている女児も。「おじいさん学校を作る」「老人ホームだ」などの大勢の年寄りをどうするかについて考える子どももある。これらの意見をまとめていると、「自分が入って百人になる。お小遣いも百倍になる」との声も聞こえてくる。それだと使う人も百倍になるけどね、と

私が呟くと、それを聞いて笑う子どももいる。

第二の質問に移ると、すかさず「やばい」「いやだ」「いや、嬉しい」理由を聞くと「だって弁当とか夜ご飯を作るのが早くなる」「でも、トイレ掃除やって、と言われて渋々やって、また違うお母さんに言われたら困る」「ただでさえ怖いのに・・・」「一人だけ残して、99人は仕事に行つて給料もらうの」「それをお小遣いにくれる」「そうじゃん、お金を入れればいいんだ」など、クラスメイトの言葉を受けて、次々に思いついたことを発言してくる。しばらく考えた様子の後、ひとりの女兒が「お金をもらった分だけお母さんを一人ずつ減らしていく」と言い出し、このこと自体は私も周りの子どももよくわからずに首をかしげていると、「戦って勝った人がお母さんになって、負けた人はどこかに行く」と発展させた意見を言う男児。またそれとは別に「お母さんが多いと赤ちゃんが一杯になる」「兄弟が増える」それに対しては「いやだあ」という声と「めっちゃいいじゃん」という声が混在した。

5. 5年〇組 (2009年2月12日実施)

座席位置が前に迫りすぎているので、黒板に円弧を書いてあらわすと、各自が考えて椅子の位置を調整。全体に中の自分を考えて動きを決めることができる力を感じる。

第一の質問をすると、すかさず「暑苦しい」「気色悪い」近くの人三人がうなずく。「こんなにはお父さん要らん」「ひとりで十分」などと男児からの声。女兒の意見を促すと、「うっとおしい」といった女兒の声を聞いているうちに、男児が「お父さんあげちゃうよキャンペーン!」「お父さん要らないよキャンペーン!」などの声を出している。百人もは要らない、お父さんはひとりで十分という方向でまとまりそうになってくる中、男児の別の意見「百人で競わせて一人だけ残して、あと99人は召使い」を、周りの子らと愉快そうに提案する。一番どういうお父さんがいいのかを聞くと「強い」あるいは「二人だけ残して片方は影武者でもいい」という意見も。しかし召使いが「99人もいるとご飯が食べられない」「食費がやばい」との声も出て、それに対しては「瓶の中にご飯を入れて百人分にすればいい」の声に周りの「うおー」と共感の発声あり。

第二の質問に移ると、即座に男児の「埋めとく!」「瓶をひっくり返して・・・」「木の葉っぱをがーんと」など言うので、「そんなひどい人ばかりなの?」と投げかけと「お母さんを二人残して、ひとり影武者」の声も。「一人取って瓶を割ったらどうなるの?」「割ったらあとの99人は出て来られなくなる」「割れないかもしれない・・・」など男児が積極的に発言を続ける。そこで女兒に振ると、「百人は要らないけれど三人ぐらいがいい」の言葉に何人かが同意した形になる。こういった新しい意見が出ると、それについて多くの子どもが考えていく。それを横にいる友達に伝えようと、あれしてこれして、とか、家事係りと食事係りなどの声が聞こえてくる。何故三人がいいのかを聞こうとするが、本人から答えの出ないうちに、周りが「一人が出かけている間にもう一人が色々して」とか「一人がお父さんみたいに仕事に行つて」とか言うが、「でも三人から怒られる」の声もある。「便利も三倍、怒られるのも三倍」というあたりが彼らの意見として集約できる部分だろうか。まだそれに関する言葉が渦巻く中、授業開始のチャイムが鳴ったので、そこまで切り上げた。

6. 6年〇組 (2009年2月5日実施)

この学級でも座席位置が近すぎたので、円弧になって前列が私から等距離になるよう話すと、板書しなくても理解できたようで、それぞれが動ける。最初の挨拶の立派さは、自分たちの挨拶の言葉が終わっても、私が話し終わるまで腰掛けないで待ってられること。普段の担任の配慮が感じられる。

お父さんが瓶に落ちるとざわめき、次々出てくると笑い声。

第一の質問に対しては、しばらくの沈黙の後、「気持ち悪い」「じゃま」「うっとおしい」「くどい」ざわざわと口々に話している。「いいんじゃないあ?」という子どもも出てくる。「怒られそうな気がする」「食糧が無くなる・・・」ここで小さい声ながら別角度の意見が聞こえたので「今、別の意見が聞こえたよ」というと、ずっと皆が静かになり、聞こうとする体制に入った。その発言を復唱して「お父さんが多いと食糧がなくなると思ったけど、その分働けるって」と私が紹介した。その児童は、お父さんはそれぞれ働

けるのだから食糧の心配をしなくても大丈夫だ、と言っていたのだ。

ここで学級全体の話題が食糧に移り、「給食を入れる！」と思いつく児童あり。するとまた皆が賑やかに口々に話し始め、瓶に食べ物を入れれば百人分は訳なく入手できるので何も困らない、ということが学級の結論のような感じになってきた。そこで私は「じゃあなぜこのお話の人は困ると思ったんだろうね…」と投げかけたままで、次の質問に移ることにした。

第二の質問に対しては、最初は「いいんじゃない？」の声。しばらく皆が口々に話し、その中でひとりの男児が「お母さんの性格にもよる」と、はっきりと主張。詳しく聞いてみると「性格が鬼みたいだったらもう邪魔だ」では鬼みたいでなかったら、と尋ねると「こづかいくれる…」と。それを聞いて女兒が「いろいろやってくれる」また別の女兒が「お母さんは服を決めるときに手伝ってくれる」そこでそれらを復唱してまとめた上で、ほかには無いかを尋ねると「宿題やってくれる」という意見、すぐさま「それは無い」「ないない」などの声の中、楽しい余韻を味わいながら、挨拶して終える。

IV 考察

1年生では「瓶」という言葉がわからなかったり、テーマの質問の意味が理解できなかったりしたので、言葉を補う必要があったが、どの学年も総じて話し合いを楽しんでいた。話し合いの中で出てきた言葉を父親と母親に分けて学年ごとに整理すると以下ようになった。

(1)父親について

- ① 1年生…影分身、本物、偽者
- ② 2年生…びっくり、怒られる、本物
- ③ 3年生…怖い、食糧、洗濯物、トイレ
- ④ 4年生…気持ち悪い、嬉しい、鏡、家来、食費、老人ホーム
- ⑤ 5年生…暑苦しい、ひとりで十分、召使い、強い、食費、
- ⑥ 6年生…気持ち悪い、怒られそう、食糧、働ける

(2)母親について

- ①1年生…いい、ご飯、宿題、怖い、怒られる、一人がいい

② 2年生…赤ちゃん、ご飯、仕事先、トイレ
お菓子、教育ママ、掃除

③ 3年生…赤ちゃん、料理、洗濯物、うちの
仕事、朝起こす、テレビ、洋服

④ 4年生…嫌だ、嬉しい、ご飯を作る、仕事、
給料、小遣い、赤ちゃん、兄弟

⑤ 5年生…二人、三人、家事係、食事係、仕
事に行く、怒られる

⑥ 6年生…いい、性格による、服を決める

このように見ていくと、まず、低学年では本物の親を探そうとする傾向、自分の父親・母親を想定して意見を言う傾向があり、学年が進むにしたがって父親・母親の役割を一般化して見ようとする傾向がつかめた。また、その役割の中身を見ていくと、子どもの世話をする内容から、次第に、性別あるいは人としての生活特性、さらに家庭経営上の役割に思い及び、親から独立した自己の主張すら見られた。

こういった学年進行による父親・母親像の一般化・客観視傾向は、教科「生活」や「家庭」で家族を取り上げる際に参考になるだけでなく、「道徳」における取り扱いの学年考慮にも示唆を与えるであろう。

今回、各学年で実施してみて、児童の発達によって学年ごとの相違を感じ取ることができた。が、それだけでなく、小学校では学級担任の持つ影響力が大変大きいこともしみじみ感じた。教師の意図した、あるいは無意識の学級経営によって、児童は大きく方向付けられていることを、教師はいつも心しておかなければならないと言えよう。

参考文献

- 1) 文部科学省 小学校学習指導要領 2009
- 2) 本山ひふみ 家庭科における保育教育の充実をめざして 愛知学泉大学・短期大学紀要第43号 2008
- 3) 佐藤園ほか 小学校低学年からの家庭科学習実践の検討 日本家庭科教育学会第52回大会研究発表要旨集 2009
- 4) 譚小勇・天野祐吉 ひやくにんのおとうさん 福音館 2000